

目次	魂の転回	1
	昭和63年度「一般研究」選考結果	2
	『親鸞の仏教史観』(曾我量深講述)について	3
	パークレーにおける3つの国際学会に参加して	5
	西ドイツの仏教研究——点描——(統)	9
	カルナダーサ先生の連続講義について	13
	チベット語訳『大唐西域記』について	14
	真宗学事資料調査報告	16
	学寮草創期並に歴代講者出身寺院調査目録	18

# 研究所報

No. 18

1988. 3. 30.

## 魂の転回

所長事務取扱 箕浦恵了  
教授・西洋哲学

学問および学問に裏づけられた技術による主知主義的合理化という文明の営みをマックス・ウェーバーは「魔法からの世界の解放」と呼んでいる。この魔法からの解放過程は、一般に学問の「進歩」と考えられるが、そもそも「進歩」はそれ自身ははっきりとした、技術上の意味以上の意味をもつものであるだろうか。ウェーバーはその著『職業としての学問』においてこのように問うている。そうして、このような問題をかれは「文明人にとって死は意味ある現象であるか否か」というレオ・トルストイの問いをもって問うている。その答は「否」である。実際文明人にとって死はまったく無意味な出来事ではない。なぜなら、無限の「進歩」の一段階をかたちづくるにすぎない文明人の生活は、その本質上、終りというものをもちえないからである。進歩という無限の階梯を登らなければならないという徒勞、その無意味な「進歩性」のゆえに「死」をも無意味ならしめている文明の生活そのものの無意味性が実は問題である。そうだとすれば、「進歩」の意味を問う初めの問いは、人間生活一般にたいする学問の職分、またその価値に関する問題だということになる。ウェーバーはここで、プラトン『国家』篇第七巻にある「洞窟の比喩」を想起している。

このよく知られた比喩においては、人間は地下の洞窟内で鎖に繋がれ、脚も首も縛られて、そのためただ前方を見るだけで、頭を回転することさえできない囚人として描かれている。囚人たちはただ前面の岩壁のみを見、かれらの背後に火が燃え、それが光源となって前面の壁にもろもろの映像を映している実情を知らない。かれらはただ壁に映るもろもろの映像だけを見るよう余儀なくされ、しかも生来かかる状態にあるため、自分が見ているそれらの影を「有るもの」(实在)と考へ、それらのものを解明の対象となして互に競いあっている。こうした囚われの状態は、かれらのうち誰かが解放されて、突如立ち上がり、首を転回し、歩み、そうして光の方に向

うまで続く。この者は鎖を断ち切り、眩光のため眼に苦痛を感じつつも、力をつくして峻しい道を昇り、ついには洞窟の外に出て、やがて太陽を見る。かれが再びもとの洞窟に帰って語るとき、人びとはかれを嘲笑し、かれは上へ昇って眼を破壊されて帰って来たと言う。かれが人びとを囚われから解放して光の方へ導き上げようとするなら、人びとはかれの使命を、人間を台なしにする「おせっかい」として、かれを断罪しようとする、とこの比喩は言う。ここにいう「かれ」とは愛知者のことであり、太陽とは学問の真理のことであり、学問のみが影ならぬ真の实在を捉えるものであることを、この比喩は示している。

この比喩を想起した上で、炯眼なウェーバーは「こんにちなんびとが学問をこのように考えるであろうか」と問うている。こんにち、学問にたいする考え方は、プラトンの比喩とは逆のものになっている。すなわち、学問が形成する思想の世界は人為的抽象からなる影の国であり、また学問によって捉えようとする真の实在は洞窟内の壁に踊る影絵のなかにあると考えられている、とウェーバーは指摘している。学問についてのこうした変化はどのようにして起ったのであろうか。

ここでわたしはウェーバーの論旨から逸れるが、「洞窟の比喩」が明示する学問の枢要を、われわれが洞窟の内に囚われていることの自覚、したがって闇から光へ向っての「魂の転回」がなければならないこととして省みたい。こんにち学問は、学ぶ者自身の「魂の転回」を忘却したものになってはいないであろうか。学問が知識を狩る狩猟術にとどまること、そのことが問題である。人間自身をすでに自明のものとして前提し、その上に知識があるいは文明がどれほど豊かに蓄積されようとも、それはもはやかの「バベルの塔」にほかならないと思われからである。

## 大谷大学真宗総合研究所

## 昭和63年度「一般研究」選考結果

昭和63年度の「一般研究」が、研究所委員会において審議・選考され、下表のように決定された。共同研究は1件である。これは62年度からの継続で、今年度は『教行信証』の信巻の比較校異を中心とした研究となる。

個人研究は4件で、それぞれ新規の採用である。吉元先生の研究は、特にパリ仏典の中でも大乘的色彩が濃く認められる新資料 Sārasaṅgaha を中心として、仏教思想史上にしめる大乘仏教の特質を再確認しようとするものである。須藤先生は、M・フーコー、J・デリダ、P・クロソウスキー等、現代フランスの思想家たちの知見に学びつつ、ニーチェの中でもことに中期ニーチェの生と思想の関係に光をあてようとするものである。藤島先生は、10世紀から14世紀にかけての中国において展開する宗教界の動向、とりわけ仏教文化の発展について総合的に把握すべく、特に対象を仏典の開校と伝播とに絞って研究される。斎藤先生の研究は、新美南吉が「哈爾濱日々新聞」に寄稿した事実は判明しているがその全貌はつかめていないので、それら未発見作品の調査・研究を行なおうとするものである。

それぞれの研究が、綿密な計画を立てており、着実な研究によって所期の成果達成が期待される。

## 昭和63年度一般研究

## (A)共同研究

研究代表者	研究テーマ及び研究組織	補助額
細川行信 教授	『教行信証』の基礎的研究(継続) 研究員 細川行信、幡谷明(以上教授・真宗学) 研究補助員 金信昌樹、村上宗博(以上博士課程)	100万円

## (B)個人研究

研究者	研究テーマ及び研究協力者	補助額
吉元信行 専任講師	パリ仏典における大乘的思想の形成 嘱託研究員 柏原信行(元本学非常勤講師・仏教学) 研究補助員 茨田通俊(修士課程)	50万円
須藤訓任 専任講師	生と思想——F・ニーチェを中心として——	50万円
藤島建樹 教授	中国近世前期における仏典の開版と伝播 嘱託研究員 大内文雄(専任講師・東洋史学) 研究補助員 桂華淳祥(助手・東洋史学) 梶浦 晋(博士課程)	50万円
斎藤寿始子 教授	新美南吉資料研究 ——「哈爾濱日々新聞」掲載作品について—— 協力者 鳥越 信(大阪国際児童文学館総括研究員)	50万円

## 研究所人事

## 交替

所長事務取扱 (昭和62年7月15日付)

(教授・哲学) 箕浦 恵了(旧 渡辺 貞磨)

(なお、「真宗学事研究」と「海外仏教研究」とにおいて、箕浦教授が渡辺教授の研究員の任を引き継ぐこととなります。)

指定研究代表者 (昭和62年7月15日付) (学長事務取扱・教授・真宗学) 寺川 俊昭(旧 北西 弘)

# 『親鸞の仏教史観』(曾我量深講述) について

前囑託研究員 福 島 和 人  
(大谷高校教諭)

## (1)

近代における大谷大学を場とする真宗(仏教)思想・  
教学の形成とその展開を探ることをテーマとする中で、  
小稿は、真宗教学者曾我量深の、昭和初期、即ち1930年  
代の思想を表わす代表的講述『親鸞の仏教史観』に学び、  
そこに見られる思想の中、殊に仏教(史)学・真宗(史)  
学の観点から、同時代的更には今日的課題から見ての意  
義の一端を知ることを意図としている。

## (2)

さて、本書において注目される見解の一つは、彼が仏  
教との生きた感応を見失う方向にあると見た、同時代に  
支配的な文献学的・実証的方法による仏教(史)研究に  
対し、弥陀の本願を、「親鸞はそれにおいて新しい生命、  
精神を汲み取った。親鸞に於てそれが生きた事実であっ  
た。」(本書)と述べるが如き真宗の信境から、それを「仏  
教の体験の事実なきところに仏教を創造しようとする」  
もので、「単なる仏教の形骸の説明であって本質の説明  
ではない。」(本書)と指摘し、そこに、仏教と仏教史と  
の関係、更には仏教を己証してきた主役として、民衆を  
仏教史の中心に据える視点を提示していることである。  
次のように述べている。

「民族祖先の体験に於て生きて居る所の仏教と云う対象  
に於て、仏教の歴史と云う方法が成立する。つまり、**仏  
教と云うことと仏教史と云うことと、対象と方法と一つ  
なのであります。**それだから、時間の中に流れて而も時  
間を超越せしめるもの、時間の中に流れると云う意味に  
おいて仏教史と云う。時間を超越せるという点で仏教と  
名づける。」(傍点、福島)

「此仏教の仏教たる所以がどこにある。今日の所謂仏  
教学者達が研究して居るような、そんなものは仏教でも  
何でもない。そう云うものがどこに生命があるか、生命  
のない、ひからびたもの、昔の曆を研究して居る。現に  
今日生きて動いて居るものが仏法です。もう死んでし  
まった所の何か故人の遺品でも調べて、これが仏法、こ  
れが根本仏法、これが原始仏教だと云う、それは原始仏

教でもない、根本仏教でもない。現に生きて動いて居る、  
それが仏法です。それが三千年の昔よりずっと伝わって  
居る、それを知らんのはインテリ学者が知らぬだけ。民  
衆は昔から知って居る。一文不知の民衆が知って居る。  
ただ知って居るのみならず、民衆の胸より民衆の胸へ伝  
わって来た、それが浄土真宗、併しそう云うものは仏教  
歴史の方に書いてない、仏教歴史と云うものはすべてイ  
ンテリが編纂したもの、だから自分の仲間だけのことが  
書いてある。(中略)念仏によって救われた所の無名の  
民衆が仏法を伝持して、そうして今日仏法がある。そこ  
を明かにしたのが浄土真宗だ。」(本書)

前者の「仏教ということと仏教史ということと対象と  
方法が一つ」とする、即ち、仏教の内に立って仏教を觀  
る、とも云い得る見解を、同時代の学問史の中に見据え  
る時、西田直二郎に代表される文化史学の主張と通ずる  
ものを見ることが出来るように思われる<sup>①</sup>が、それ以上  
に、明治以降の仏教・真宗(史)学の方法や姿勢を照射  
している事実を見逃してはならないと思われる。即ち、  
仏教や真宗への学びが、ともすれば求道への実践よりも、  
文献の分析・解説に終始し、仏教による開悟への志願と  
救済による生命の感動を欠ききらいのあった文献考証の  
仏教(史)学の盛行のみをもたらし、又、真宗教学と真  
宗史学への分化の中で、真宗教学と云う学びが、時代・  
社会の提起してくる宗教的課題をもって教えに問うとい  
う意欲と姿勢を欠き、教義の詮索に閉塞して信心の働き  
を失い、一方、真宗史学においては、真宗の信界との実  
在的感応を失い、従って、教義や史実を研究対象とする  
時には、真宗の信界はその対象化の前に生命を隠してし  
まうという、即ち、真宗をとらえているつもりが、実は  
現実が提起する宗教的課題に対峙し、自らの主体と実存  
をかけての求道的知見を描いては知ることの出来ない真  
宗の信境から離れるという皮肉な事態に対し、彼の見解  
は、その乖離を超える方向を孕むものであったのである。

## (3)

さて、後者の仏教史における民衆の重視は、次に述べ  
る観点と連なって注目されることである。即ち、本講

の中のもう一つの注目点は、講題が示す通り、親鸞の名著『教行信証』の意義を、「史観」という表現において、つまり、親鸞を通して仏教史の上に史観を提示した事実である。即ち、

「私は近来、熟々に『教行信証』を拝読していますうちに、此浄土真宗とは何ぞやと云う問題に直面しました。然るにふと感得したことは、浄土真宗と云うのは、これは親鸞の体験せられた新しき仏教史観であったのである。親鸞が正しい仏教史に就ての見方、つまり、仏教史の伝統、仏教展開の歴史の正しい相、正しい仏教の精神、それを明らかにした。だから浄土真宗と云うのは、つまり親鸞の感受せられた仏教史観の名乗である。」

「二千年の仏教展開の歴史、其仏教史の根幹となるものは何であるか、それが、遂に親鸞をしてはっきりと其古来一貫する歴史観、即ち、仏教史の根幹精神を内観するの心眼を開かした。其の史観こそ即ち浄土真宗というものであった。」(本書)

と、『教行信証』への学びを通して、浄土真宗を親鸞の仏教史観の表現としてとらえている。これを、同時代の仏教研究に対しての彼の見解、例えば

「現今仏教研究の大勢を顧るに、遂に一貫した仏教の真理の体と云うものは何にもないのであります。其史観の上に一貫したる仏道精神は何もなしに、徒なる学究的仏教史と云うもののみが残る。」そのような研究は、「過去の仏教を説明する学問」として「一種の仏教史観」として認められるが、所詮「そう云う仏教史観は宗教否定の唯物論と云う基礎に立つての仏教滅亡を説明する所の仏教唯物史観」である。「親鸞の仏教史観に於ては、敢て斯かる仏教史観に一概に反対するのではありませぬ。それらをもやはり内に包んで居るのであります。」

等を合わせ読む時、彼の見解の同時代における意義が見えて来るように思われる。即ち、明治時代後半から昭和初期へかけて進められた仏教(史)研究は、仏教文献の解説や比較研究にめざましい進展をもたらし、教団や仏教界の護教的体質にまわりつかれた教(伝)説を批判・解放する役割を果たしたにもかかわらず、それは仏教の教化を受け、覚醒することを願う明確な意識からするものではなく、科学への志向を立場とする文献学的・実証的研究の潮流に乗り、その方法による研究の一分野としての仏教(史)の解明であったと云える。つまり、仏教(史)の認識・体系の根幹となるべき仏教による自覚・知見に立つ仏教史観や仏教的世界観の形成、即ち、仏教(史)に関する歴史哲学的考究には見るべきものは生まれていなかったのである。そのような学問の状況下において、彼は、今日において

「歴史的認識が、われわれの歴史的な生き方に何らかの力を与えるというのは、実は、それが歴史観として、自己のうちにとりこまれた時に、初めて真に内面化された思想的力量となる」<sup>②</sup>と云われる如き歴史認識の立場

としての仏教史観を、本書において創出したのであったと思われる。

更に眼を同時代の日本の学問の状況へと向けるならば、史学においては、文献考証・実証主義を標榜するアカデミック史学の他に、マルクス主義史学、津田史学・柳田民俗(史)学、文化史学等を挙げ得るが、前二者が既に官憲の弾圧下に沈黙を余儀なくされる中で、皇国史観が狂奔を始めるのである。即ち、曾我が本講を講述した昭和十年は、丁度文部省の「教学刷新評議会」の発足に見るように、昭和初年以來、右翼勢力により強硬に押し進められ出した皇国主義・史観が国家権力と結合を深め、国民を意識面においても、天皇を頂点とする擬似国家宗教の内へ巻き込まんとして動き出す画期の年に当たっている。それは「初めから日本の『国体』への絶対的讃仰と無謬性を証明することを旨とし」、「民衆は忠孝一体の論理で、家→国=天皇に属することだけが価値」<sup>③</sup>ありとされる、即ち、国家に奉仕する臣民としてのみ重視され、自覚への存在としての民衆一人一人への眼を全く欠如するものであった。この意味において、前にふれた如く、本講における曾我が仏教史認識に見られる民衆の重視は、柳田の民俗(史)学や西田直二郎の文化史学における民衆の生活への温かな視線<sup>④</sup>と並んで貴重な意味を持つものと思われる。それは、当時、在野の真宗教学者として、各地の念仏の同朋・民衆の中に身を運んでの共感に溢れる教化活動を、その教学・思想當為の原点としていた彼の生の在り方に無縁のものであったとは思われない。

#### (4)

ところで、このような民衆を主軸に据える彼の仏教(史)認識が、その後のファシズムと戦争の嵐の中で、どのような変化と展開を見せたかについては、本講に続く『歎異鈔随聞記』(昭和16年)、『歎異鈔聴記』(昭和17年)、『日本の世界観』(昭和19年)等の吟味によって確かめなければならないところである。

しかし、本講は仏教の歴史観についての、理念・志願を提起する性格のものであったのに対し、畏友金子大栄は『日本仏教史観』(昭和15年)において、近代における仏教(史)学が実証した研究業績による歴史事実を踏まえつつ、文化史学的手法をもって、史実の肉付けを伴う仏教史観を叙述しており、本講と肝胆相照らす研究成果として注目されるが、その吟味は別の機会に譲りたい。

①西田直二郎『日本文化史序説』中の第一講「文化史と歴史学」参照。

②深谷克己『状況と歴史学』

③永原慶二『皇国史観』(岩波ブック・レット)

④家永三郎『日本の近代史学』参照。

パークレーにおける3つの

## 国際学会に参加して

研究員 多田 稔  
本学教授

1987年の夏に仏教関係の3つの国際学会が行なわれた。場所は米国サンフランシスコの対岸にあるパークレー。以下は8月6日から15日まで連続して行なわれた第3回国際真宗学会、第8回国際仏教学会、仏教とキリスト教対話集会、に参加した報告記である。

### 第3回国際真宗学会

会場はカリフォルニア大学パークレー校キャンパス内の同窓会館と教員食堂で行なわれた。参加者は約100人でカリフォルニア、ハワイ、日本はもとより、全米、カナダ、ヨーロッパ、アジア各地からも参加者があった。2年前に第2回大会がハワイで行なわれ、その時、今回はパークレーでということになり、準備が始まったと聞く。この真宗総合研究所でも講演していただいたパークレー校のルイス・ランキャスター教授や、仏教研究所(パークレー校キャンパスのすぐ近くにある)の人たち、殊にケネス・田中博士や、サンフランシスコ湾岸一帯にある真宗寺院の開教師の方々の御協力、また事務局の龍谷大の稲垣久雄教授らの御盡力によって、参加者には気持のいい大会が行なわれたのであった。会は6日の夕方から始まった。登録後の開会式では、この学会の会長で

あるハーバード大学仏教講座の永富正俊教授の基調講演が行なわれた。その主旨は次の如きものであった。

1951年に西本願寺の前門主がはじめてハーバードへ来られた時から、1984年に、今度は新門主が来られたのであるが、その期間に、国際的な視野でみると、真宗に対する見方がどんなに変ってきたことか。1984年のその時点で、初めて真宗が国際的に登録されたといえるのである。以来、種々のアプローチによる真宗研究がなされている。年を追っていい論文も出ている。ここで私が強調したいのは、こうしたアプローチの原点に立った上で、つまり、親鸞の時代の日本だとか、仏陀の時代の印度とかの社会背景においてではなく、現代を背景として、そこにおいて真宗のあるべき姿が出てくるようなものがほしいということである。真宗における社会的倫理の不活潑さは批判されねばなるまい。印度のカーストの底辺の人たちへの運動を活潑に行なっている他の宗教者たちの姿をみよ。と同時に、もちろんのことではあるが、真宗の教義の深い理解、親鸞の「空」の内容を解明せねばならぬ。そうした研究を、いわゆる真宗学の枠内においてではなく、textual criticismの枠にとらわれず、世界的な宗教

的自覚の運動の先頭に立って行なわねばならぬ——といった極めて格調の高いものであり、参加者たちの熱烈な拍手で応えられたのである。(因にこの真総研の海外仏教研究班で長年盡力いただいたロバート・ローズさんは、この永富教授に受入れていただき、目下、彼の許で研究を続けている。)

翌7日、朝7時からパークレー仏教会での草田春好師による勤行及びこの寺院の歴史に関する感銘深い話をきき、8時30分より午後5時30分まで、パークレー校同窓会館で行なわれた研究発表をずっと聞く。この日の夕方には懇親会と総会が行なわれた。前記このパークレーの仏教研



民族色豊かな参加者たち—Tea Break—

研究所の所長アルフレッド・ブルーム博士が、心臓手術のため、博士の Keynote Speech がランキャスター教授によって代読された。その主旨は、永富教授と同様に、「真宗学研究的国際化を喜び、様々な学問によって様々な角度からのアプローチがなされることは極めて結構なことだが、その根底において、清沢満之の持っていたような燃えるようなものがなければその研究は空中分解するだろう」と言って、且って清沢は主観的すぎるという批判されたが、これからの各種アプローチを行なう前提としての清沢満之を高く評価したのは印象的であった。

8日も8時30分から研究発表が行なわれた。この日は大学教員食堂を貸り切って100名の熱心な聴衆を前に次々とペーパーが読まれ、午後はパネル・ディスカッション“State of the Art in Shin Buddhist Studies”が展開された。研究発表者とその邦文の題目を次に記しておく。(パークレー大会での研究発表はすべて英語で行なわれた。敬称略、発表順)

- 嵩 満也 (龍谷大学大学院) 「真宗の大乗的な面の考察」  
 西崎京子 (岡山女子短大) 「南無阿彌陀佛の意味するものについて」  
 デニス・広田 (本願寺翻訳センター) 「親鸞と証空における宗教的変容」  
 ケネス・田中 (パークレー仏教研究所) 「中国仏教における浄土の性格についての論争—現代的解釈についての意味」  
 ケネス・オニール (カルフォルニア) 「心配のない宗教：真宗の普遍性に向かって」  
 稲垣久雄 (龍谷大学) 「真宗における『力』の救済論的意味」  
 田中教照 (武蔵野女子大学) 「教行信証における涅槃経の重要な役割について」  
 釈晚鸞 (韓国西願寺) 「親鸞と元暁における隠顕釈について」  
 ジョン・キーナン (ミドルベリー大学) 「インドにおける浄土教の体系—仏地経と他力思想」  
 ショウヘイ・イチムラ (シャトル) 「ブルノ・ベツォルドの真宗理解」  
 藤谷政躬 (オクスナード仏教会) 「翻訳における暦法上の問題：親鸞の歿年について」  
 ジョン・イシハラ (カルガリー大学) 「真宗の社会倫理」  
 ロナルド・ナカソネ (パークレー仏教研究所) 「真宗倫理に向かっての法蔵説話の新解釈」  
 ローランド・タググチ (ハワイ真宗協会) 「現代のアメリカ教育に対する寄与としての自然」  
 徳永道雄 (京都女子大学) 「浄土教に見られる空」  
 村上利夫 (カナダ仏教団) 「浄土真宗における自由の

観念」

- ロジャー・コーレス (ディユーク大学) 「他力の遊戯性」  
 ジョン・カーター (コルゲート大学) 「道 (magga) と信心の生起」  
 タイテツ・ウンノ (スミス・カレッジ) 「禅と真宗」  
 シトク・ベル (アントワープ真宗センター—慈光寺—) 「ヨーロッパの真宗研究の現状」

かくして次回第4回国際真宗学大会を1989年夏、ホノルルで開くことが告げられ、盛会裡に閉会した。そうして、閉会式はそのまま第8回国際仏教学大会の懇親会となっていったのである。

### 第8回国際仏教学会

俄然人数がふえて、民族色豊かな衣裳をきた参加者が目立つ。8日夜の特別番組の「コンピューターによるサンسكريット文献研究」(東北大学研究グループ)のworkshopからはじまり、9日、10日と、何と18会場にもわかれての研究発表が始まった。発表は1人30分以内、長い仏教史における多種多様な仏教各派とその聖典やその研究、はたまた比較宗教学、社会学などの立場からのpaperが読まれていったのである。その発表者と題目をすべてここに記すのは大変なので割愛させていただき、その18グループのTopicsだけを以下に記載させていただくが、正直言って、同時進行がこんなに多くては、聞きたい発表にもすべて出るわけにはゆかぬ。真宗学会では全員がすべての発表を聞きながら会が進行していったし、人数も100人足らずであったので、確かにpaperの質は玉石混肴ではあったが、それなりに評価できたのである。この国際仏教学会の方は、参加者は多いかもしれないが、18の分科会で各人30分、勝手にしゃべりまくるだけである。参加者の少ない分科会などでは発表者と司会者と、2、3人の参加者がいるだけというもあり、深い検討が加えられたとも見受けられなかった。私は真総研で2度に亘って講演してくれたニューヨーク州のコルゲート大学のJ. R. カーター教授のpaperを聞き、その他3つばかりのぞいてみたが、たまたまその3つとも専門用語の使いすぎで、私のような門外漢には専門的にすぎる感がして、辟易し早々に退散し、楽しんだのは学会で仕立ててくれた観光バスであり、これに乗りこんで金門橋の北にひろがるミューア・ウッズのアメリカ杉の原生林をみにいったことであった。

8月9日午前の部・前半

- 第1分科会 Ethical Concerns in Buddhism  
 (発表者5名)  
 第2分科会 Society and History—I (発表者3名)  
 第3分科会 Yogacara Studies—I (発表者4名)  
 第4分科会 East Asian Buddhism and Related Tradi-



「対話」集会の一コマ

tions (発表者 4 名)

第 5 分科会 Buddhist and Indian Philosophy  
(発表者 3 名)

午前の部・後半

第 6 分科会 Buddhist scholasticism (発表者 3 名)

第 7 分科会 Society and History-II (発表者 3 名)

第 8 分科会 Yogācāra-II (発表者 3 名)

第 9 分科会 The Doctrine of Emptiness (発表者 3 名)

9 日午後は前記の観光バスで、サンフランシスコの東洋美術館見学とミュア・ウッドとチャイナタウンでの夕食が組込まれた半日観光のため発表なし。

8 月 10 日午前の部・前半

第 10 分科会 Mādhyamika Studies (発表者 4 名)

第 11 分科会 Textual Studies-I (発表者 4 名)

第 12 分科会 Buddhism and Art (発表者 3 名)

午前の部・後半

第 13 分科会 Textual Studies-II (発表者 4 名)

第 14 分科会 Buddhism and Art-II (発表者 3 名)

第 15 分科会 Methodology of Textual Studies  
(発表者 3 名)

8 月 10 日午後の部

第 16 分科会 Philosophical Perspective (発表者 3 名)

第 17 分科会 Mahāyāna Literature (発表者 3 名)

第 18 分科会 Ch'an Tradition (発表者 3 名)

かくして、午後 4 時、Sherry タイムをもってにぎやかなこの学会は終了した。

ところで、3 つ目の学会はもう既に始まっていたのである。

#### 東西対話集会

この 10 日の朝の大学のキリスト教会堂におけるヒューストン・スミス教授の講演で、6 日間の多彩な行事が始まっていたのである。そもそもすでに 25 年にもなろうと

する、あの第 2 パチカン公会議において、キリスト教界の大同団結の方針が打ち出されて以来、キリスト教側における他宗教への理解が生じてきたのであるが、今回のように、大々的に仏教各派とキリスト教の対話をもたれたことはなかったのである。今回、東西の門戸としての、このサンフランシスコ湾より東洋を望むバークレーの地で、世界各地からの参加者を集めて、キリスト教と仏教の対話集会が開かれたのである。この地は名門カリフォルニア大学バークレー校があるのはもとより、1962 年に設立された総合宗教大学院 (the Graduate Theological Union) がある。この GTU は 3 つのカトリック系、6 つのプロテスタント系、その

他のキリスト教関係諸機関が合体して作られた神学大学院である。1500 名の学生を擁している。さらに、1966 年、全米の日系社会人の支援をえて設立された前記の仏教研究所 (The Institute of Buddhist Studies) も、1985 年にはこの GTU の傘下に入って、キリスト教のみならず仏教の総合大学院として発展しているのである。今回この GTU が中心になって、2 つの仏教学会にひきつづき、この東西対話集会をもつに至ったのは誠に時宜にかなったものと思われる。また、今回のこの集会のもう一つの特色は、次の点にあったといえよう。そもそもバークレーの仏教研究所は、アメリカにおける唯一最高の公立の仏教研究所である。その使命は、英語文化圏における仏教研究を専門的に行ない、東西文化・学術交流のかけ橋的な役を果たすことである。しかしながら、立地的条件からいっても、カリフォルニア日系人の影響が強く、従って、この研究所を取りまく環境からしても、その多くの日系人の抱いている浄土真宗の力が強いのは当然のことであった。従って、1985 年における GTU との合併ということは、真宗の国際化という側面をもっていたのである。そうして、今回、その GTU が中心となって東西対話集会を開いたのであるから、従来の東西対話といった時には、仏教代表は主として禅、それも鈴木大拙及び京都学派といわれている人たちの臨済禅の力が圧倒的に強かったのである。このことには、戦前よりの鈴木大拙の不屈の努力と、戦後の全米の多くの大学において行なわれた講演の賜物がみられるのである。その後に行った Zen ブームによってもわかるように、多くの平均的アメリカ知識人にとっては、これまでは、仏教といえば禅であったのだ。その後、アメリカ人の東洋への理解が進むと共に、仏教理解も多少ではあるが進んでいったといえよう。そうして、仏教には、浄土真宗という極めて日本的な仏教がある、ということに気がつくに至ったのであ

る。その一方では、在米の日系移民たちの二世、三世の活躍と大学への進学によって、日系人の社会的地位が上り、真宗が単に日系人の宗教であるばかりではなく、アメリカの知識人や学界において注目をあびるようになってきたのである。英語が達者な真宗の信者である日系人が、自己の宗教を英語で披歴するようになり、アメリカの知識人にうったえるようになってきたのである。かくして、キリスト教との対比において禅が果たしていた役割りの一端を、今や真宗が荷うようになりはじめた、と言えると思う。宗教問題における言語の重要さということ、存分に知らせてくれたのが鈴木大拙の功績の一端であると私は思っている。もしあの流暢な個性あふれる英文の書物と講演がなかったら、戦後のアメリカにおける禅ブームは存在しなかったろうと断言できよう。私はこのことを、この集会の一環であった夕べのパネルにおいて、真宗を紹介された海野徹雄師（スミス大の海野大徹の兄）のジョークを交えた英語のスピーチにおいてひしひしと感じとったのである。かくして今や国際舞台における真宗の出番なのである。

大学のキリスト教会堂における朝の講演は次の方々毎日常順番になされた。ヒューストン・スミス教授、阿部正雄教授、土居眞俊教授、ディビッド・カルバハナ（ハワイ大）教授、ドブーム・タルク師（ダライラマの代表者）そして、夕べのパネルでは、それぞれ次の題目の下に世界各地から来た仏教者・キリスト者のパネリストたちが発話された。

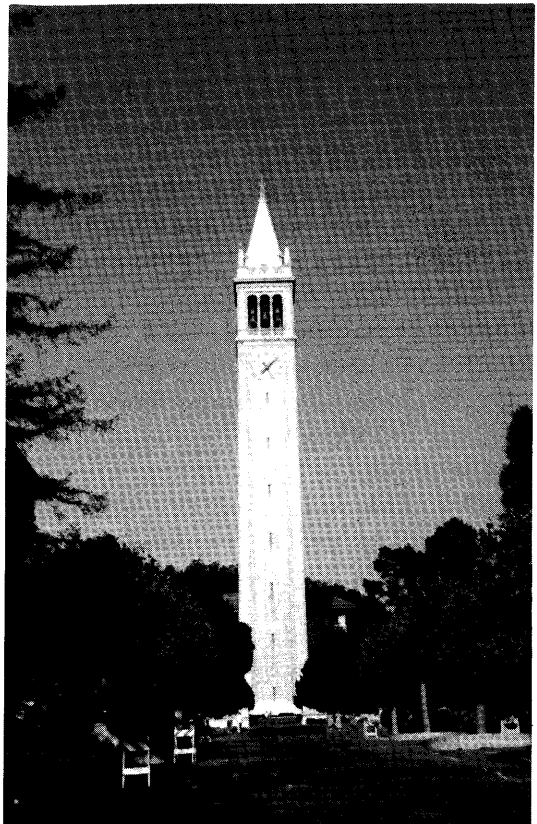
- 8月10日(月) Peace
- 11日(火) Meditation and Prayer
- 12日(水) Death and Dying
- 13日(木) Women in Christianity and Buddhism
- 14日(金) Ethics

そうして、朝夕のこの行事の間に「対話」のグループのプログラムがぎっちりとは組まれていたのであった。「対話」のテーマは次の通り。

- Buddhism in America (2回)
- Causation in Buddhism and Christianity (3回)
- Comparative Hermeneutics (4回)
- Korean Minjung Theology and Buddhism (4回)
- Liberation Theology and Buddhism (3回)
- Monasticism (5回)
- Religion and Healing
- Sunyata and Kenosis
- Women in Buddhism and Christianity

この間を縫って、個人の研究発表の paper が毎日10編位読まれていった。そうして夕食前の時間には、Meditation Service の実習がなされた。坐禅、カトリックのお祈り、大乘仏教の冥想、キリスト教の賛美歌詠唱等それぞれのグループが Workshop を開いて実地指導

をしてくれたのである。Dinner のあとの前記 Panel Discussion は、バークレー校の象徴であるあの高い塔の下にある大講堂で、毎晩数百人の参会者を一堂に集めて行なわれた。毎回終わってホテルへ帰るともう11時になっていた。こうして月曜から土曜の正午までが、全く息もつかせぬ内に進行していったのであった。これはと思うペーパーやカセットテープは購入して持帰った。関心のある方々には是非お伝えしたいと思っている。書物でしか知らない著名な人たちに直接会って言葉を交えるのも学会の余得であろう。「世界は動いている」ということを実感させられた「対話」集会であった。余韻尚々めやらず、気がついたらバークレーの開教師、今井さんのお宅に招かれて、そこでいただいた美酒に酔っていた。次の日には、そそくさと荷物をまとめて日本へ帰国した忙しい10日間であった。帰国以来、殆んど息つく暇のない生活を送ってきたがために、報告会をもつことも出来ず、今日まで来たことを皆さんに深くお詫びすると共に、貴重な機会を与えて下さった真総研所長や海仏研をはじめ、関係の皆様から心から感謝する次第である。尚丁度この原稿を書いている時に、ハワイの仏教研究所長、藤谷義昭師からお手紙をいただき、来年のハワイでの国際真宗学会には、大谷大学の多くの方に研究発表に参加して下さいよう依頼が来た。関係各位、殊に若い研究者の方々の積極的参加を強く呼びかけたい。



カリフォルニア大・バークレー校のシンボルタワー



## 西ドイツの仏教研究—点描— (続)

チーフ・研究員 長崎 法潤  
本学教授

(3)

よく雨が降り、吐く息が白く見える。8月下旬のハンブルグの気候は、日本の11月中旬を思わせる。時々強い風が吹き、人々はみなレインコートを着て歩いている。ホテルから研究発表会場のハンブルグ大学に向う通りでは街路樹は黄色に染まり、雨に打たれて一面に道路に葉を落としている。

話は前後になるが、8月27日、第2部会の午前の発表が終ると、シュミットハウゼン教授に昼食を誘われた。フェッター教授とチベット学のルエグ教授も加わり、大学の構内を足早に7、8分歩いてインド料理のレストランに入った。4人で部会の発表についていろいろ話しながら食事をし、終るとそのビルの3階に案内された。実は、そこがハンブルグ大学のインド学科、正式には Seminar für Kultur und Geschichte Indiens なのである。

まず図書室を見せていただいた。かつて、ハンブルグ大学は、ジャイナ教研究、プラークリット研究で著名なシュブリング (W. Schubring) 教授 (1881-1969)、アルスドルフ (L. Alsdorf) 教授 (1904-1981) が活躍し、不朽の伝統を築いたところである。その方面の図書はもちろん充実しているが、仏教関係、チベット関係の図書もよく集められている。しかし、ルエグ教授によれば、近年チベット文献の出版が次々と出るので、すべて集めることは不可能とのことである。

シュミットハウゼン教授の研究室に通され、そこでお茶をいただいた。シュリニバサン (S. A. Śrinivasan) 教授、客員としてハンブルグ大学で研究中の御牧克己博士もお茶に加わった。南インド出身のシュリニバサン教授は、アルスドルフ教授のもとで Saṃkhya-tattvakaumudī の研究をなし、学位論文 Vācaspatimiśra's Tattvakaumudī (Hamburg, 1967) を出版している。近年、Nātyaśāstra, Rāmāyaṇa の研究についての出版もある。

インド古典文学のヴェツラー教授、仏教学のシュミットハウゼン教授、チベット学のルエグ教授、インド哲学のシュリニバサン教授が講筵を張るハンブルグ大学のインド学科は、西ドイツの他大学に比較して、最も充

実している。第32回国際アジア・北アフリカ研究会議では、ヴェツラー教授は書記長 (Secretary General) として研究会議全体にわたっての大役をつとめた。シュミットハウゼン教授は第2部会「仏教研究」、ルエグ教授は第3部会の小部会C「チベット学」、シュリニバサン教授は第10部会「東南アジア」のコンヴィーナールをそれぞれつとめた。4教授の努力によって今回の研究会議が実現したと言っても過言ではなからう。

チュービンゲン大学のティーメ (P. Thieme) 教授の高弟であるヴェツラー教授が、退官したアルスドルフ教授の後任者としてハンブルグ大学の正教授になったのは34才の若さの時であった。Paribhaṣa IV. V. XV. Untersuchungen zur Geschichte der einheimischen indischen grammatischen Scholastik (Hamburg, 1969), Bestimmung und Angabe der Funktion von Sekundär-Suffixen durch Pāṇini, (Wiesbaden, 1975) などの出版があり、インド古典文学の権威であるが、Die wahren. "Speiseresteesser" (Wiesbaden, 1978) のような叙事詩研究もある。さらに、インド哲学に関する研究をも手がけ、その論文も発表している。

シュミットハウゼン教授が、ネパールのムスタンクで客死したベルンハルト (F. Bernhard) 教授 (1931-1971) の後任者として正教授になったのは32才の若さの時であった。教授は、ウィーン大学の故フラウワルナー教授の高弟の一人で、唯識に関するすぐれた研究はよく知られている。Sautrāntika-Voraussetzungen in Viṃśatika und Trīmśika, Wiener Zeitschrift für die Kunde Süd und Ostasiens XI, 1967, Band XI, Wien. Der Nirvāṇa-Abschnitt in der Viṃśatikasamgrahaṇī der Yogācārabhūmiḥ. Wien, 1969をはじめ、教授は数多くの研究論文を発表している。また近年刊行された Karma and Rebirth: Post Classical Developments (State University of New York Press) の第12章ではカルマについて論じている。教授は、L. アルスドルフ教授の記念論文集「ジャイナ教と仏教の研究」と題する Alt- und Neu-Indische Studien 誌 23 に、On some Aspects of Descriptions or Theories of 'Liberating Insight' and

‘Enlightenment’ in Early Buddhism という論文を載せているが、そこで滅盡定に言及し、筆者の論文「滅盡定について」(大谷学報、29-2)をとりあげ、「滅盡定は、涅槃を定というかたちで表現したものである」という筆者の結論に賛意を示している。筆者の論文は和文であるが、教授は日本の仏教学者の書いた論文を精力的に読み、日本の仏教研究の成果をとり入れながら研究を進めている。教授の研究室には、日本の仏教研究書が並んでいた。

シュミットハウゼン教授の研究室を出て、教授に誘われ、チベットのタンガのコレクションを見に行った。エッセン (Gerd-Wolfgang Essen) 氏の個人コレクションであるが、今回の研究会議の第3部会小部会C「チベット学」の参加者に人数を限定して見学の機会を作ってもらったものである。電車で15分ほど行った Othmarschen 駅に降り、高級住宅街を7分ほど歩くとエッセン氏の立派な家に着いた。

これほどすばらしいタンガを見るのは初めてである。それを壁いっぱい並べ、天蓋、幢幡、瓔珞を飾り、チベット寺院内部のように荘厳がほどこされている。個人のコレクションとしては世界一を誇り、ダライラマもここを訪れ、見られたことがある。あらゆる種類のタンガが全部そろっている。奥にも部屋があり、そこには、さらに興味深い、稀少で価値の高いタンガが飾られている。貴重なチベットの仏具が並んでいるなかに、ブロンズの小さな仏像をいくつか見つけた。手にとると、それらはインドのナーランダ仏、すなわちパーラ王朝に属する仏像である。エッセン氏に尋ねると、ナーランダからチベットにもたらされた仏像である。ナーランダからチベットに行ったインドの学僧たちがもたらした仏像が長くチベット寺院で大切に伝えられ、それがタンガとともにエッセン氏のコレクションに収まっているのである。チベットのラマ僧で、還俗した Ngari Tulku 師がハンブルグに17年間住み、エッセン氏に手伝い、タンガの整理をしている。いずれコレクションの図録を出版する、と言っていた。

#### (4)

ゲッティングは古い静かな大学町である。町の中心街から乗ったバスは、しばらくすると丘をのぼり、立派な家のある緑の中を通る。やがて坂道を少しさがると Brüder Grimalle という終点に着く。バスを降りると、目の前に尖った屋根の家があり、そこがインド学仏教学研究 (Seminar für Indologie und Buddhismuskunde) である。

もともと研究所の建物は、トゥルファン写本の解読と研究において偉業をなしとげたヴァルトシュミット (Ernst Waldschmidt, 1897-1985) 教授の自宅であった。1957年に自宅と全蔵書を大学に寄贈されたが、教授の存命中は、そこに住んでおられた。亡くなられてから全室

を大学に引き渡し、教授夫人は今、研究所の近くに住んでおられる。研究所の入口にあるプラークに、ヴァルトシュミット教授の自宅で、寄贈されたものである、と書かれている。

ハルトマン (Jeans-Uwe Hartmann) 博士の案内で研究所内を見学した。一階には講義室、図書室、研究室、事務室がある。二階はベッヒェルト (Heinz Bechert) 教授の研究室になっている。教授はネパールに出張中でお留守であったが、研究室を見せていただいた。ここはヴァルトシュミット教授が自分の書斎として使用されていた部屋であり、ヴ教授が集められたインドの細密画が飾られ、ヴ教授の帽子まで大切に壁にかかっている。三階には研究室、トゥルファン写本の編纂室などがあり、Dr. Klaus Wille が現在その仕事を担当し、Sanskrithandschriften aus den Turfanfunden の第6巻 (Teil 6) を準備中である。

グリーンヴェーデル (Albert Grünwedel, 1856-1935)、フォン・ルコック (Albert von Le Coq, 1860-1930) によるドイツのトゥルファン探検隊 (1902~1914の間に4回の探検) によって、ドイツにもたらされた仏教写本は、第二次世界大戦中ドイツ各地に分散して疎開されていたが、現在の西ドイツに分散してあった写本はゲッティングのこの研究所に集められている。その他の大部分は東ベルリンのアカデミーに保管されている。研究所にある写本を見せていただいた。一葉、あるいは断片を二枚のガラス板に狭んで、大切に保管されている。

地下はライブラリーになっていて、沢山の図書が蔵されている。その中に W の記号がラベルについているのは、もともとヴァルトシュミット教授自身の蔵書であり、その数はたいへん多い。

研究所内の何か所かに古代インド文字がペンキで書かれている。玄関から部屋に通ずるドアには『ヴェーダ』讃歌がデーヴァナーガリー文字で書かれていたり、クローゼットの上にはアショーカ文字、チベット文字、デーヴァナーガリー文字が書かれている。講義室の黒板の裏にもサンスクリットが書かれている。これらの文字はすべてヴァルトシュミット教授の奥さんが書かれたとのことで、研究所内を飾る装飾のように、所員がそれを大切に保存している。

一階の図書室に置いてあるカードボックスを見せてもらった。一つのカードボックスはすべてヴァルトシュミット教授の著書、論文にあてられている。Mahāparinirvāṇasūtra (大般涅槃経)、Catuspariṣatsūtra (四衆経)、Mahāvadānasūtra (大本経)、その他の著作、多くの論文のカードに一枚一枚目を通しながら、一生涯、仏教研究に徹底的に情熱をもやした教授の偉業にあらためて驚かされた。

ベッヒェルト教授の著作、論文もすべてカード化されていて、その量もかなり多い。教授は原始仏教、とくに

テラヴァーダ仏教の研究者であるが、東南アジアの現代仏教をフィールドワークによって研究し、シンポジウムをまとめた *Buddhism in Ceylon and Studies on Religious Syncretism in Buddhist Countries* (1978), あるいは *Buddhismus, Staat und Gesellschaften in den Ländern des Theravāda-Buddhismus*, Band 1 (1966), Band 2 (1967), Band 3 (1973) などがある。その他 PTS 171に *Pali n̄ti texts of Burma* (1981) を研究所のブラウン博士との共著で刊行している。ゴンブリッチ (Richard Gombrich) 博士との共編で *Die Welt des Buddhismus* (München, 1984) があるが、その英訳はロンドンから出版されている。

ベッヒェルト教授は現在、「ネパールにおける仏教の近代化」という研究プロジェクトを組織し、現代のネパール仏教を調査するため毎年ネパールに出かけている。今まで教授はスリランカ、タイ等の東南アジアの仏教をフィールドワークをもとにして研究してこられたが、ネパール仏教の研究は、その最終的なものである。ハルトマン博士もプロジェクトのメンバーであり、ネパールに調査に何回か出かけている。

研究所のブラウン (Heinz Braun) 博士はビルマ語とパーリ語の専門家で、前述の *Pali n̄ti texts of Burma* (1981) のほか、*Burmese manuscripts, pt. 2* (Daw Tin Tin Myint との共編) (Stuttgart, Steiner, 1985) などを刊行している。ハルトマン博士は、M. A. ではギルギット写本の *Candraprabha-avadāna* を、博士論文ではトゥルファン写本にある讚仏詩人マートリチェータの *Varṇāhavarṇastotra* を研究している。Dr. Klaus Wille は M. A. ではギルギット写本の *Mulasarvāstivāda-vinaya-vastu* を研究した。北京から来ている Hu Hai-yan 女史は *Poṣadhavastu* (*Mulasarvāstivāda-vinaya-vastu* の一章) を研究している。チベット人のリンポーチェ Champa Thupten Zongtse 師には、ダルマスワーミンの伝記 (チベット語テキスト) の刊行 (Delhi, 1981) 等がある。

当研究所には日本の学者が今まで何人か留学しているが、筆者が訪れた当時、榎本文雄氏、松村恒氏夫妻がそこで研究にうちこんでいた。

翌日再び研究所を訪ねると、ディーツ (Diglinde Dietz) 博士が筆者を待っていた。博士は、*Fragmente des Dharmaskandha* (*Ein Abhidharma-Text in Sanskrit aus Gilgit*) (1984), *Die Buddhistische Briefliteratur Indiens, Nach dem tibetischen Tanjur herausgegeben, übersetzt und erläutert* (1984) などの研究書を刊行している。

博士の研究についていろいろ話しているところに比丘パーサーディカ (Bhikkhu Paśādika) がやって来た。彼はタイで出家したドイツ人仏教僧であり、筆者とはナランガ時代の学友である。現在、ドイツの実家に帰り、ベッヒェルト教授の仕事を手伝っている。彼は、ロ

ンドンから刊行されている仏教研究誌 *Buddhist Studies Review* の副編集長でもある。彼に会うのは20年ぶりであるので、話は盡きなかった。

ディーツ博士の研究室は研究所から少し離れたアカデミーにあるので、そこに案内していただいた。ベッヒェルト教授は、研究所とアカデミーとの両方の主任をつとめている。サンスクリット語辞典 *Sanskrit-Wörterbuch der buddhistischen Texte aus den Turfan-Funden* はアカデミーで編纂・刊行されている。沢山のサンスクリット語のカードが一部屋に整理されて置かれている。辞典の第4巻まで刊行され、第5巻は印刷中であり、現在第6巻の準備が進められている。

ディーツ博士の研究室で現在手がけているサンスクリットのテキストを見せていただいた。また、ベッヒェルト教授が中心になってアカデミーの仏教研究委員会 (*Kommission für Buddhistische Studien der Akademie der Wissenschaften in Göttingen*) が進めている仏教サンスクリット文献のビブリオグラフィー (*Systematische Übersicht über die buddhistische Sanskrit Literatur*) についても説明していただいた。その第1巻を湯山明博士が担当し、Teil 1: *Vinaya-Texte*, von Akira Yuyama (1979) がすでに刊行されている。これは、仏教サンスクリット文献の研究を組織的にすべて網羅する遠大な計画である。次々と刊行されることが待たれる。

比丘パーサーディカと別れ、夕刻、ブラウン博士とのアポイントメントをとってあったので、研究所に戻った。ブラウン博士から貴重な情報を沢山得ることができ、多くの御教示をいただいた。研究所員はみな帰宅し、研究所は静まりかえっていた。

## (5)

西ドイツを旅していると、壮大なゴシック様式の古い教会がよく目につく。ところが、それらのほとんどは、国土が戦場と化した第二次大戦中破壊されたが、もと通りに復元された建物である、と聞いて驚かされる。そこにドイツ人の抱く古い文化や学問に対する態度が示されているような気がする。

三階建て灰色のボン大学の建物も戦禍をうけたが、完全に復元され、中世的な落ち着いた雰囲気をもたえている。Regina-Pacis Weg という通りにそって、大学の建物が一直線に300メートルほど連続している。途中二ヶ所に道路が貫いていて、車が通りぬけている。建物の最も奥のあたりの入口を入り、大きな螺旋階段をのぼると、そこにインド学研究室がある。

ハーン (Michael Hahn) 教授とアイマー (Helmut Eimer) 教授のお二人が研究室で筆者を待っておられた。ボン大学のインド学は古い歴史を誇り、1827に最初にサンスクリット研究がなされている。かつてヤコービ (Hermann Jacobi) 教授 (1850-1937) が長年月ここで

講筵を張っていた。

ハーン教授は、古典サンクリット文学、インド仏教の譬喩文学を研究する学者であり、日本人学者との交流もさかんに行っている。Nagarjuna's Ratnāvalī (Bonn, 1982)をはじめ、たいへん著書の数が多い。教授の研究室にはチベット語、サンスクリットの写本が沢山コピーで集められている。とくに研究中のJataka-mālaについては、日本、ロンドン、パリ、ネパールから集めた12種の写本コピーが置かれている。教授は、サンスクリットのどんなに立派な校訂本にも必ずミスがあるので、研究には第一に写本を重視する、と言っておられた。教授の徹底した文献学者としての態度を示す印象的な言葉である。

アイマー教授はチベット学、とくにアティーシャの研究で知られている。教授には、Berichte über das Leben des Atīśa (Dīpamkaraśrījñāna) (1977)等の研究がある。

Claus Vogel教授はギルギット写本の研究者、Monika Thiel-Horstmann教授はバクティの研究者である。Thiel-Horstmann教授にはお会いする機会がなかったが、ヴェエダをヒンディーで講義するほど現代インド語にも通じている女性学者である。インド人学者 Dr. T. R. Chopra は、ヒンディー、ウルドゥー、サンスクリットの講師である。

研究室を出て、ハーン教授とともに、中世風の町並が続く通りを歩いて、バートーヴェンの生家を見てから、一週間後に再びお会いすることを約束してボンを去った。

## (6)

ボンからウィーンに行き、ウィーン大学では仏教論理学、とくにダルマキールティの研究家として著名なシュ

タインケルナー (Ernst Steinkellner) 教授、インド学研究所のオーバーハンマー (Gerhard Oberhammer) 教授にお会いし、ウィーンのインド学仏教学研究の現状についてお聞きする機会を得た。ここではそれについて記すことを省略したい。

ところで、仏教研究のさかんなハンブルグ大学、ゲッティンゲン大学、ボン大学を訪ね、そこでお会いした学者を中心に西ドイツの仏教研究について記したが、これはあくまでも目に映った断片的な印象にすぎない。訪ねなければならない大学、記さなければならない仏教学者はまだまだ多くいる。研究成果のうち言及しなければならないものもまだ多く残されている。

西ドイツの仏教研究について、その断片的な印象から語ることは危惧を感じるが、西ドイツの仏教研究を今も強力に支える力、原動力は何であろうか、と、ふと考えることがある。ヨーロッパの国々のうち、西ドイツの文献学を中心にした仏教研究は、その質と量において群を抜いている。サンスクリットの写本を重視するドイツの文献学は、どこにその学問的姿勢の根源があるのだろうか。それは、今もギリシャ語、ラテン語を高校で基礎語学として学ぶドイツの教育にその根源があるのではなからうか。ギリシャ語、ラテン語を基礎語学として重視することが、仏教の文献学を根本的に支える基礎になっているのではなからうか。

このことを、フランスの仏教学者ロベール (Jean-Noël Robert) 博士に会ったとき、話題にしたことがある。ロベール博士も筆者と同意見であった。 [完]

[1987. 4. 1]



ハウス ヴァルトシュミット

## 海外仏教研究

カルナダーサ先生の連続講義に  
ついて (報告)

囑託研究員 浅野 玄誠

昨年(2009)の10月、スリランカ (Sri Lanka) のケラニア (Kelaniya) 大学から、カルナダーサ (Y. Karunadasa) 先生が来日され、約2ヶ月間、京都を中心に精力的に活動された。真宗総合研究所海外仏教研究班でもこの機会を生かして、2度、研究会を開催した。最初は10月29日に“The Theravada Version of Dharmavada”と題して行なわれ、2回目は“The Central Conception of Early Buddhism”というテーマで11月5日に講演していただいた。いずれも、この講演のために書き下ろされたペーパーが用いられ、『研究所紀要』に逐次掲載される予定である。これとは別に、講義4回、座談会1回の都合5回にわたり、連続的に講義をしていただいた。この講義の目的は、専門的な課題に終始しがちな研究会のような枠組みを離れて、もっと概説的に先生の知識を披露していただき、また自由に質疑できる機会を用意することであったが、その目的は概ねかなえられた。

カルナダーサ先生は、1934年にスリランカに生まれられ、ケラニア大学で仏教学を学ばれて後、イギリスに留学され、ロンドン大学でPh. D.を取得されている。

ご専門はPali 仏教であるが、僧籍はなく、在俗の仏教信者でもある。現在はケラニア大学パーリ・仏教学科 (Department of Pali and Buddhist Studies) の学科主任という要職に就いておられると同時に、“The Journal of Humanities & Social Science of the University of Kelaniya”の編集委員の一人としても活躍中である。

連続講義は大学の学園祭期間とも重なったため、それほど多くの出席者には恵まれなかったが、先生は丁寧な英語で分かりやすく講義され、さらに質問にも熱心な返答を与えてくださるなど、出席者にとってはかえって有益な時間を持つことができた。以下に第4回までの連続講義の内容をおおざっぱにまとめ、報告にかえたい。

[第1回] 10月23日午後4:10~5:30 出席者10名  
Thema: The Religious and Intellectual Background of Early Buddhism

ヴェーダ以来の、インドに於ける宗教および哲学的思惟の伝統を背景にしながら、初期仏教が如何にして宗教的な *sassatavāda* と論理的な *ucchedavāda* の二辺を超えてきたかを、仏陀の言葉を参照しながら概説された。歴史的な説明を中心に据えて、最後に初期仏教の縁起説に触れられた。

[第2回] 10月26日午後4:15~5:40 出席者13名  
Thema: Early Buddhist Theory of Knowledge (Epistemology)

前回の歴史的概説を受けて第2回では、初期仏教の認識論を中心に講義していただいた。最初に、初期仏教に於いて否定されるべき認識と肯定されるべき認識とが対比的に説明され、最後に仏教内部に於ける認識の階梯として *viññāna*, *sañña*, *pariñña*, *abhiñña*, *pañña* が個別に解説された。

[第3回] 10月27日午後4:15~5:35 出席者13名  
Thema: The Social Thought of Early Buddhism

一口に social thought といっても、この課題の包括する範囲は多岐にわたる。講義は要領を得て展開され、インドの宗教のもつ神観、創造観、カースト観と初期仏教の視点との対比に始まり、仏教内部に於ける戒律や、僧侶と在俗信者との関係、さらには救済観や現代的な課題にまで話が及んだ。たいへん興味深い課題ではあったが、事が現代スリランカの宗教事情に至っては、われわれ聴き手の側に宗教的な術語(英語)への対応が充分でない場面もみられた。パーリ仏教の研究といえばテキスト研究が主流の日本にあっては、こうした課題に触れることができたのは有益であったといえよう。

[第4回] 11月5日午後4:15~5:40 出席者8名  
Thema: The Buddhist Doctrine of Causality (Paṭiccasamuppāda)

仏教に於ける最重要課題、縁起の問題を、*Nyativāda*, *Adhiccāsammuppāna*, *Issaranimmanāvāda*, *Svabhāvavāda*, *Satkāryavāda* といった比較すべき対論を掲げながら概説された。

以上、雑駁ではあるが、カルナダーサ先生の連続講義の概要を整理してみた。各講義は1時間ほどであったが、その後、出席者の質疑に30分ほどがあてられた。

第5回は、総合的な質疑のために座談会形式で行なわれた。出席者の質問内容は、大乘仏教の立場からパーリ仏教の教義や現在の教団の宗教活動を問うものが多かった。印象的であったのは、カルナダーサ先生が答えられる場合、その回答の根拠のほとんどが仏陀の言葉に依っていることであった。多くの経典や仏伝を空んじておられることに感心するとともに、もう少し現代スリランカの仏教徒として、ご自身の立場や思想をお聴きしたいという、くいたりなさも残った。

お話しいただいた内容は概論的であり特に目新しいものではないが、パーリ仏教の現場の第一線の学者から講義を受けられたことは、われわれの知識を再点検する意味に於いても貴重な機会であったといえるであろう。

## 西藏文献研究

「チベット語訳『大唐西域記』について」  
——大谷大学所蔵西藏蔵外文献叢書の発刊——

研究補助員 松田 和信

チベットといえば、かつてはその地理的状況から入国さえ困難な未知の地であった。しかし、そこでは九世紀以降、インドから輸入されたさまざまな仏典が翻訳され、チベット人自身も独自の著作を数多く積み重ねて、中国や日本とはまた違った高度の仏教文化が開花していたのである。

前世紀の終わりから今世紀初頭にかけて、西欧の探検家たちの関心はシルクロードに、そしてその隣のチベットに集まったが、彼等は失われた仏典を求めて——中には西欧列強の領土的野心の片棒を担いで——チベットをめざした。その中には、我国からの旅行家の姿もあった。彼等は多かれ少なかれチベット語文献を我国に持ち帰ったが、その中でも寺本婉雅（1872-1940）、河口慧海（1866-1945）、多田等観（1890-1967）の持ち帰った文献類は質量いづれをとっても世界でも有数のコレクションに数えられている。

チベット人は仏教にかんする多くの典籍を残したが、それらは大きく二つに分けることができる。つまりインドの仏典を訳した翻訳文献（ただし若干の漢文重訳文献を含む）、およびチベット人自身が最初からチベット語で著した文献類とである。前者はチベット大蔵経を指し、後者は一般に蔵外文献と呼ばれている。

大谷大学図書館には、後に大谷大学教授となった寺本婉雅が齎した文献を中心に四千点以上ものチベット語コレクションが保存されている。寺本婉雅は、中央チベットのラサ入りは河口慧海に遅れるが、明治以降チベットの地を踏んだ最初の日本人であった。

本学では、寺本婉雅教授以来、多くの人々がチベット語文献の研究に携わり、『北京版西藏大蔵経』の經典部の勘同目録、大蔵経自体の影印版、そして現在も継続中の論典部の勘同目録の出版を始めとして、蔵外文献についても目録と索引が出版され現在に至っている\*。現在研究は、当研究所に組織された西藏文献研究班において継続されている。

\*勘同目録、蔵外目録・索引は本学図書館および当研究所において実費ですべて入手可能であるので、必要な方は問合せられたい。

ところで、全巻影印出版された『北京版西藏大蔵経』に比べ、蔵外文献については、請求に応じて複写サービスが行なわれているとはいえ、いづれも貴重本のため、気軽に利用できるわけではなかった。内外の研究者から

蔵外文献の影印版の出版が待ち望まれていたのである。このような要望に答えるべく、このたび本学では、『大谷大学所蔵蔵外文献叢書』の名のもとに、蔵外文献を順次出版する運びとなった。なお本シリーズは当研究所の西藏文献研究班が編集を担当し、出版は臨川書店に委託される。

ところで、寺本婉雅蒐集のコレクションは、青海、北京、内蒙古系の文献が主で、他の専ら中央チベットで集められたコレクションに比べ、内容的にも際立った特徴を持っている。そのためもあってか、ここには他のコレクションにはない文献が数多く含まれている。その一つがシリーズ第一分冊に選ばれたモンゴル人の手になるチベット語訳『大唐西域記』である。これは木版本ではなく、一人の手によって最後まで見事なウーチェン体で書写された写本である。木版本以外に多くの写本類を含むのも本学コレクションの特徴である。

コレクションの中から最初にチベット語訳『大唐西域記』を見出したのは本学名誉教授の佐々木教悟博士であった。博士は1953年に学界にこれを紹介し\*、その中で、これがモンゴル人のグンポキャブ (mGn po skyabs, 佐々木博士はゴンポー・チャブと表記) によって、18世紀の中葉に翻訳されたものであることを明らかにした。

\*「西域記のチベット語訳及びその翻訳者」（『印度学仏教学研究』2-1）

佐々木博士の研究によって、本書はにわかに注目を浴びることになったが、当時、コレクションは未公開であったため、一般には閲覧は不可能であった。しかし、1973年になって本学の写本は、突然モンゴルのウランバートルから『モンゴル写本叢書』の一冊としてピラ (Sh. Bira) 博士の手によって全く無断で影印出版される。一体如何なるルートで本書が流出したのか不明であるが、恐らく著作権とか版権などという概念は存在しないであろう国の話であるから、モンゴルで生まれた本書が故郷に帰ったと思えば、そう目くじら立てるほどのことではないのかもしれない。

しかし、幸いにもというべきか、不幸にもというべきか、ウランバートル版『大唐西域記』(?) は印刷不鮮明で研究にはほとんど使えないような代物だったのである。なお、けなすだけでは片手落ちになるというもの。ここでピラ博士の業績にも触れておこう。博士は影印版の前に、自身の序文をロシア語で付している。博士は次のように述べている。

……後世のチベット、モンゴルの歴史研究者にとって、グンポキャブの翻訳は全く知られないままに終わらなかつたことを述べる必要がある。モンゴルのノモンハンがグンポキャブの翻訳を利用したであろうことは予想できる。なぜなら、1830年に書かれた彼の有名な著作『閻浮台の長い長い御話』の中で、我々は『西域記』の記述に出会うから

である。これにかんして、モンゴルのノモンハンの著作の一部を翻訳したワシリエフが以下のように書いている。「マングジュリーフトクトがどこで『西域記』を知ったのかは興味深い。不思議ではあるが、あるいは『西域記』のチベット語訳が存在したのであろうか。」

博士の序文はさらにグンボキャブの伝記に及び、我々に新事実を知らせてくれる。ワシリエフの卓見にも驚かされるが、この博士の記述からすると、『西域記』のチベット語訳はモンゴルの歴史家にはよく知られていたものらしい。とすると本学の写本も世界唯一の孤本というわけではないのかもしれない。ただしピラ博士は何も言わないのでモンゴルには残っていないのかもしれないが\*。

\*ピラ博士の出版を私に知らせて下さったのは、早稲田大学大学院でモンゴル史を専攻されている石濱由美子氏である。氏は同書の複写に添えて、私の読めないピラ博士のロシア語の序文を和訳して送って下さった。上の翻訳は石濱氏によるものである。御教示に感謝したい。

そんなことを思っていると、最近になって注目すべき報告が中国から齎される。実は、中国にも本書が保存されていることが馬久、阿才両氏によって発表されたのである\*。付されている写真からすると、これは本学の写本の無断複製!ではなく、全く別の写本あるいは木版本のようであった。本学の写本は世界の孤本というわけ

はなかったのである。

\*「『大唐西域記』蔵訳本校勘」(『世界宗教研究』3号、1984)

今回出版された影印版には、佐々木博士の新たな解説とともに、チベット語訳と漢文原典の項目別対照表が付されている。これによって、チベット語訳『西域記』に出るインド・西域の国々、および人物の事蹟等にかんする項目はすぐに検索できるよう配慮されている。

チベット語訳『西域記』の奥書には、グンボキャブに『中国仏教史』の著作のあることが記されている。本学のコレクションにはこの『中国仏教史』も含まれている。こちらはチベット人にもよく読まれたらしく、本学にあるものも、写本ではなく木版刷の一本である。これもいづれ、本シリーズの一冊として出版される予定となっている。なお、シリーズの次回出版は、サンブ学園寺系の学僧ツァンナクパ(12世紀)の著したダルマキールテイの『量決訳(Pramānaviniścaya)』の註釈書の写本を予定している。これはチベット人の書いた註釈書の中では現存する最古のもので、しかもこちらは掛値なしに世界唯一のものである。

最後に、本シリーズが広く研究者に利用されることを願って、チベット語訳『西域記』紹介の言葉としたい。

(臨川書店刊・定価18,000円)

『研究所紀要』第5号が刊行されました。内容は以下に示すとおりです。ご希望の方は研究所までご連絡下さい。

東本願寺中国布教史の基礎的研究	木場明志 桂華淳祥
「私」の現象学的究明のための覚書	池上哲司
北朝末隋初における襄陽と仏教	大内文雄
敦煌資料と高山寺『西遊記』第十七章の類似点	Victor H. Mair

昭和六十一年度研究所報告  
執筆者紹介

ラスキンの芸術教育論—芸術と道徳の関係についての考察—	佐々木正昭
マシュー・アーノルドの宗教観	
—Culture and AnarchyからLiterature and Dogmaへの展開—	村瀬順子
ウォー、グリーンと宗教(1)	鈴木繁一
オックスフォード運動の文学への貢献—John Kebleの場合—	内藤史朗
「オックスフォード運動」の意義	多田稔
The Theravāda Version of Dharmavāda	Y. Karunadasa
The Appeals of Asian Religion in Modern America:	
Myths and Realities	Carl Jackson
The Lotus and Vajra Meditation of Tendai Buddhism	
—The Use of Madhyamika in Tendai Tantric Ritual—	M. R. Saso

日時：昭和62年12月23日(水)

場所：研究所会議室

## 真宗学事資料調査報告

研究員・専任講師 木場 明志  
同 草野 顕之

昭和62年3月に資料調査を行い、能登の往還寺（石川県珠洲市）では前年度「学寮草創関係資料調査」の補充調査を、そして能登・越中地域の学寮講師輩出の4カ寺の歴訪では、講師等が自坊に遺した典籍類等を中心に、主だったものについて資料目録カードを作るとともに、写真撮影を行った。以下はそれらをもとにした調査概報である。調査には研究員木場明志・草野顕之、研究補助員綿谷勝信・宮崎健司の4名があたり、報告のとりまとめは真宗学事研究スタッフの全員があたった。

### ○往還寺（石川県珠洲市立立町鶴飼）

学寮草創期にあって尽力した樹心（円澄）を輩出した寺。調査目的は、寛文5年（1665）学寮草創説の根拠とみられる同寺蔵『学寮之由来』（ロ-8）を拝見することであった。理綱院慧琳講師の筆になると伝えるこの資料は、その後大谷大学図書館所蔵の慧琳自筆本『論註深義記伊高抄』の文字と対照の結果、伝承通り慧琳筆と確認した。慧琳生存年代は正徳5年～寛政元年（1715～89）であり、講師職にあった明和2年（1765）以降の筆とすると寛文5年からすでに100年を経ている。「研究所報」

（No16）に既掲のごとく、この資料に寛文5年のこととする学寮講堂創建は延宝6年（1678）であって錯誤しているが、それにしても「寛文5年」の年次の初見資料として確認できた。学寮内にこうした年次の伝承があったことになる。この慧琳の活躍期でもある宝暦5年（1755）4月の「寛文年中御壁書之写」（『学寮諸制条』所収、谷大図蔵）には、「寛文年中被仰出候制条」といい、又「御学寮講堂ニ懸置候制条」と記している。遡る延宝2年（1674）11月21日の『学寮所化心得五ヶ条』（『粟津日記』所収、谷大図蔵）は、遺憾にも寛文年中に触れる記述を持っていない。したがって、慧琳在世の頃に、寛文年中から学寮が続くことが学寮によって意識され、慧琳自身はそれを寛文5年からと考えていたことが理解される。そして、それはとりもなおさず宝暦5年（1755）になされた学寮機構の抜本的改革を契機として、意識の端のぼってきたものと結論づける事ができよう。第2代講師香厳院慧然在職中のこの年に、講堂・寮舎とも移転新築し、職制改革を行って機構を整備し、文字通りの新体制

となったのであった（詳細は『研究所紀要』第2号P.140～P.144参照）。同年3月頃の『学寮新体制二付慧然言上書』（『真宗大学寮沿革略誌』所収）の冒頭が、「当山ノ学林ハ寛文年中ノ御創建ニシテ……」と始まるのが全てを語っている。慧琳は慧然のあとをついで第3代講師となっているのである。

往還寺ではその他の資料も拝見したが、それについては後掲の表を参照願いたい。

### ○常德寺（石川県羽咋郡富来町鹿頭）

獅子窟とも号した第14代講師賢珠院得住を生んだ寺。得住の手になる記録・講録が大量に保存されていることが調査によって判明した。あまりに大部のため、年紀の記述のあるものに限って調査カードを作成したが、その理由は、得住について従来は明治7年（1874）示寂のことは知られているものの、生年が不祥で、そのため年令も分かっていなかったからである。年紀と年令をともに記したものの例として、師の短歌集『芳野花杖』（ニ-1）を挙げるならば、奥書によって天保12年（1841）3月、50歳の時に吉野山へ花見に行き詠じたものを、明治5年（1872）81歳の時にまとめて冊子としたという。この2つの年次・年令からの逆算による生年は一致して寛政4年（1792）となる。他の資料に見える文化14年（1817）26歳（ト-1）、天保3年（1832）41歳（ト-6）、慶応元年（1865）74歳（ト-8）など、当然のことながら計算があう。したがって、得住の生存年代は寛政4年～明治7年（1792～1874）、83歳で示寂と判明したのであった。

得住購入の黄檗版一切経は境内の経蔵にそのままあり、師の自坊での研鑽ぶりも偲ばれるところであった。師は第11代講師開悟院靈暉の弟子であったため、師匠からの拝領遺物として「開悟院師着用紫黄紋白五条袷袷」が現存し、学系の正統性を裏付けている。また、学寮のどこかの鍵として伝わっている鍵は、まさにどこの鍵であったのであろうかと考えざるを得なかった。

なお、常德寺に近い富来町鹿頭の本光寺には、学寮の寮司であった本光寺義澄に充てた、明治3年（1870）頃と思われる学寮からの呼出状・道中通行手形・先触・泊割などの、学寮と自坊との往来に関する資料が保存され



ていることがわかったが、立ち寄りの時間がとれず調査できなかったことは残念であった。

#### ○開正寺（富山県高岡市下河原町）

香月院深叻と並び称される、第6代講師円乗院宣明の入寺した寺。度々の火災を受け、多くの什物を焼失したとのことであり、後掲の表のように今回拝見できた宣明関係資料は計3点にとどまった。しかしそのなかで注目されるのは、宣明が開正寺において主宰した学寮「雲処堂」の関係資料が見られたことである。この「雲処堂」の存在自体は、「大谷派学事史」（『続真宗体系第』20巻）あるいは『円乗院言行録』で明らかにされているが、今回拝見した「宣明書状」（イ-1、なお『円乗院言行録』には同文の高岡市西方寺蔵書状を掲載）において、その充所が「雲処堂知事申・惣大衆申」となっていることから、その実在が確認されたのである。さらに、「開正寺縁起」（ロ-1）中、「開正寺系図」部分の宣明の先代「自然」の項の頭註に、「明和七年三月、……経蔵并学寮雲処堂を建つ」との記事から、その草創年代及び創始者名が判明し、宣明の開正寺入寺の事情に大きな手掛りが得られたように思われる。また、この「開正寺縁起」には宣明の高弟亮空が草した「雲処堂記」が所収されている（『円乗院言行録』所収の原典）、宣明による「雲処堂」運営の理念が読みとれる。

近時、学事史研究において、学寮あるいは教学の、社会的役割解明の必要性が指摘され（広瀬泉『大谷大学三百年史』に向けて）研究報No13）、その具体的事例として三講師の地方での教化活動のことが話題となり（『大谷大学320年史の語るもの』P.81P.115～116）、その手掛りを求めていたところ、図らずもその一端を知り得たのである。今後の真宗学事研究の一視点としなければならぬ。

#### ○真敬寺（富山県西砺波郡福光町竹内）

第18代講師香華院義天を生んだ寺。義天は文政10年（1827）に生まれ、高倉学寮に入学し、明治元年（1868）擬講、同16年（1883）嗣講に進み、同22年（1889）4月17日講師に任じられたが、同日に病死したため、講師としての実質的な活動は行っていない人物である。このように、義天は比較的新しい時代の講師であるため、師に関する資料は多数残されていた。例えば、嗣講・講師の任命状（ハ-17.21）を始めとする学事関係の文書類、あるいは明治政府の政策により、僧侶が任用された教導職への任官状（ハ-7.13.18.19）などがまとめて見られた。

そのなかで特に注目されるのは、都合4冊残されている義天の日記類（ロ-1～4）である。この4冊の日記により、明治2年（1869）から同21年（1888）までの師の行動を追うことができる。詳細に内容を検討していないので、その価値について速断することはできないが、当時の教団がかかえていた、宗政改革や教育改革、ある

いは両堂再建といった重要課題と師との関わり、また先にも述べた教導職としての活動と学寮講師としての教化活動との差違などに関する記述が期待され、今後の解説作業がまたれるところである。同時代の教団関係資料としては、従来より知られている『配紙』のほか、渥美契縁の『巖華自伝』（東本願寺蔵）や『巖如上人日誌』（前同）、また学事関係資料としては、第15代講師香山院龍温の手記・雑記類（谷大図蔵、研究補助員深田虎雄氏告示）などがある程度で、学事史の比較的不明な時期である。この義天の日記類の検討により、それが少しでも埋められたらと考える。

#### ○円満寺（富山県中新川郡上市町稗田）

第11代講師開悟院靈咄の住した寺。靈咄関係資料として、自筆の「由緒書」（ロ-1）、講録4点（ト-1～4）、書蹟2点（ニ-2.3）、及び靈咄関係文書4点（イ-2.3.5.6）を拝見した。

従来、靈咄伝は「晩年失明するも、一日も講筵を絶たず」（谷大図刊『書香』第4号）と伝えているが、「靈咄口上書写」（イ-3）に「眼病ニ而印形不能」と記され、「緞子呪子袈裟免許状」（イ-6）に「近来乍病中、御意向出精相勤候ニ付……」と評されていることなどから、そのことがほぼ確認された。

さらに靈咄伝の問題としては、その没年月日を「嘉永4年10月16日」とするものと（「大谷派本鬘沿革略」）、「嘉永4年8月15日」とするもの（「上首寮日記」）の両者があり、紛らわしかったのであるが、今回拝見した円満寺の寺伝である「開悟院靈咄講師略歴」（ロ-3）には、「嘉永4年8月15日」と明記されており、この日であろうことが確認された。

また、同じ「開悟院靈咄講師略歴」によると、靈咄は「洗心寮」という学寮を自坊に営み、地方教化に勤めていたことが判明した。その遺構は近年まで境内に残されていたという。靈咄は、先に紹介した宣明の弟子であることから、開正寺の「雲処堂」で学んだと思われ、師の教化活動を見て、「洗心寮」設立を図ったものと考えられよう。ただ、その運営に関わる資料は、今回全く拝見できなかったが、「開悟院靈咄講師略歴」によると、同寺に「隷名帳」が残されていることが記されており、再度の調査が必要になるかもしれない。

また、靈咄とは直接関わらないが、「宣明書状」（イ-4）も拝見できた。

# 学寮草創期並に歴代講者出身寺院調査目録

研究補助員 綿谷 勝信 編

## 凡 例

- 寺別の目録は次のように構成した。  
イ 文書 (題目・様式・寸法・日付・差出人・宛所・備考) 口記録 (題目・様式・寸法・日付・記録者・宛所・備考) ハ 任官状 (イと同様) ニ 書跡 (題目・様式・寸法・筆者・備考) ホ 絵画 (題目・様式・寸法・備考) ヘ 法具 (品目・使用者・備考) ト 典籍 (題目・様式・寸法・筆者・備考)
- 文書類は、原則として年代順に配列した。但し「往還寺記録」としてまとめられている往還寺の19~45の文書は、年代順とせず冊子の記載順とした。
- 講録は便宜上記録に含めた。尚その場合、差出人の欄には講者名を宛所の欄には筆録者の名をしるし、さらにそれが転写されている場合は転写人を備考の欄に記した。書跡については同様に差出人の欄に筆者名を記した。

## 往 還 寺

分類	番号	題 名	様式	寸法タテ×ヨコ	日 付	差出人(記録者・講者・筆者)	宛 所	備 考
イ	1	樹心法名軸	軸装	31.5×40.5	延宝5. 8. 27	常如	樹心	写し一点あり
〃	2	恵明院書状写	折紙	17.0×44.5	2. 18	恵明院	南溪寺	折紙は切断
〃	3	横超寺願意書状	折紙	29.5×43.5	2. 20			封上書「往還寺様人々御中 願意」
〃	4	南溪寺書状	折紙	31.5×44.7	3. 9	南溪寺□□	往還寺円作老	円作は樹心の父
〃	5	南溪寺書状	折紙	30.7×44.5	3. 11	南溪寺□	往還寺	病氣見舞いの札
〃	6	恵明院書状写			3. 盡	恵明院	樹心	
〃	7	某書状	折紙	31.5×44.5	6. 10		円作	伝樹心書状
〃	8	恵明院書状写	折紙	34.0×46.0	6. 15	願入寺	南溪寺	
〃	9	光海書状写			6. 24	光海	樹心	日野環氏の写し
〃	10	南溪寺書状	折紙	31.5×45.0	7. 12	南溪寺□	おこう 喜右工門	無事を喜び、おいちゃ死去について述べる

分類	番号	題名	様式	寸法タテ×ヨコ	日付	差出人(記録者・講者・筆者) □□(金邊か)	宛所	備考
イ	11	南溟寺書状	折紙	30.6×44.5	閏8. 8	南溟寺	往還寺	
〃	12	栗津右近書状	堅紙	32.0×43.5	8. 24	元□		封上書「往還寺殿 栗津右近」
〃	13	栗津右近書状	切紙	18.5×101.7	8. 28	栗津右近	往還寺円作老	上京催促
〃	14	海老名主税書状	折紙	33.0×39.0	9. 3			封上書「南溟寺様 海主税」
〃	15	樹心書状	折紙	31.1×45.8	9. 10	樹心	策伝	近況を伝える
〃	16	円作書状	折紙	30.3×44.5	9. 25	円作	策伝	門主御成り等の様子を知らす
〃	17	円作書状	折紙	31.5×44.5	12. 15	往還寺円作	策伝・善右エ門	
〃	18	樹心書状	折紙	31.4×45.5		じゆしん	おいちゃ、おなつ、おみつ	
〃	19	飛鷹出仕願書控			文政2. 7. 22	往還寺詠法	集会所月番御衆中	以下45番迄の文書は「往還寺記録」(口3番)所収
〃	20	由緒略書控			文政2. 7	〃	〃	
〃	21	太子七高祖御免願上の控			文政10. 6	〃		
〃	22	飛鷹目願上の控			文政10. 5	往還寺法隨	集会所御衆中	
〃	23	飛鷹目再願の控			文政10. 6	〃	集会所月番御衆中	
〃	24	本坊ら指出候添書の控			亥. 5	妙巖寺 正円	〃	
〃	25	飛鷹出仕費用の覚			卯. 7. 26	極印所	往還寺	
〃	26	宿播磨屋新兵衛算用書控			卯. 7. 26	新磨屋新兵衛	〃	
〃	27	太子七高祖御免の控			文政12. 3. 17	下間大藏御・下間宮内御	往還寺詠法、慶哉	
〃	28	太子七高祖御免費用の控			亥. 6. 29	極印所	往還寺	文政10年か
〃	29	太子七高祖箱書費用の控			丑. 3. 28	〃	〃	文政12年か
〃	30	太子七高祖表具并に取次御礼の控			6. 29	寅次郎	往還寺	
〃	31	色法服御免願書の控			亥. 6. 15	妙巖寺	集会所月番御衆中	
〃	32	色法服御免願書の控			亥. 6. 20	妙巖寺正円	集会所月番御衆中	
〃	33	金入輪袈裟御免願書の控			亥. 5	妙巖寺正円		
〃	34	金入輪袈裟御免再願の控			亥. 5	妙巖寺□円		正円か
〃	35	飛鷹出仕御免御印書の写			文政2. 7. 26	石井隼人・栗津出羽介	往還寺詠法	詠法49歳とあり
〃	36	御伝鈔御免御印書の写			文政2. 7. 29	石井隼人・栗津出羽介	往還寺詠法	
〃	37	御伝鈔伝授御免の写			文政2. 7. 29	集会所	顯真坊	
〃	38	開山御影御免の写			文化2. 1. 23	嶋主税・宇野相馬	詠法・是心他三名	

分類	番号	題名	様式	寸法タテ×ヨコ	日付	差出人(記録者・講者・筆者)	宛所	備考
イ	39	御代様御影御免の写			文化2. 1. 16	嶋主税・宇野相馬	誹法・是心他三名	
〃	40	粟津右近書状写			閏12. 10	粟津右近	円作老	
〃	41	常如書状写				常如	元隅	
〃	42	一如書状写			6. 25	一如	樹心光海	
〃	43	木仏・寺号御免御印書の写			延宝6. 8. 16	粟津右近	往還寺円作	
〃	44	木仏寄附状の写			8. 28	〃	〃	
〃	45	珠数許状の写			8. 27	森川小十郎	樹心様人々御中	
ロ	1	往還寺由緒	袋綴	24.7×18.0	延享2. 3	智春		智春は往還寺13世
〃	2	往還寺由緒書上控	切紙	27.8×59.0	文政10. 5	往還寺誹法	集会所月番御衆中	
〃	3	往還寺記録序	冊子	24.8×17.1	天保5. 4			冊子中は文書19~45番に掲載
〃	4	明細帳	冊子		明治5. 9			
〃	5	往還寺由緒略記						『往還寺記録』に所収
〃	6	御講者次第書写	冊子	24.8×18.0				
〃	7	樹心大略	冊子					内題「大略相記ス」とあり
〃	8	学業之由来	卷子装	18.2×35.8				筆者伝書琳、学業創設を寛文5年と記す
〃	9	往還寺法宝物縁起	冊子					

## 常 徳 寺

分類	番号	題名	様式	寸法タテ×ヨコ	日付	差出人(記録者・講者・筆者)	宛所	備考
ロ	1	一念念記文唯信鈔	袋綴	22.7×15.8	文化10. 11. 5	宣明(講者)	賢哲(筆録者)	文政3年、得住堺の泉然寺で転写
〃	2	広文類聞書	袋綴	23.5×16.5	文政4. 8. 5	靈性(講者)	林永(筆録者)	講義地正院西光寺
〃	3	広文類引換			文政4. 8. 5	靈性(講者)	林永(筆録者)	正陀(院)西光寺にて書写
〃	4	書精日録	袋綴	22.4×15.8	嘉永4	得住		得住聽講のとき記す
ニ	1	芳野花枝	袋綴	21.8×15.1	明治5	得住		天保12年3月の花見を晩年(81才)詠ったもの
ト	1	教行信証樹心録(化巻)	袋綴	22.8×16.1	文化3	智暹		文化14年得住26才大津で購入

分類	番号	題名	様式	寸法タテ×ヨコ	日付	差出人(記録者・講者・筆者)	宛所	備考
ト	2	教行信証樹心録(信巻)			文化3	智暹		「沼南得住求之」とあり(奥書)
〃	3	教行信証樹心録(教巻)				智暹		
〃	4	一念多念証文記	袋綴	24.9×17.1	天保2.7.15	得住		
〃	5	般若講	袋綴	16.0×11.8	天保3.1.1	得住		
〃	6	入出二門偈	袋綴	24.0×17.0	天保3.閏11.29	得住		得住41才のとき書写
〃	7	一念多念証文記		23.6×17.4	弘化4.6.晦	得住		魚津照善寺で書写
〃	8	改邪鈔(内題)	袋綴	22.9×16.0	慶応元.8.27	得住		得住74才新齋講師寮で書写

## 開 正 寺

分類	番号	題名	様式	寸法タテ×ヨコ	日付	差出人(記録者・講者・筆者)	宛所	備考
イ	1	宣明書状	切紙	17.0×36.0	1.16	宣明	雲処堂知事・惣大衆中	雲処堂は明和7(1770)年、第八世自然が開いた私塾
ロ	1	開正寺縁起	袋綴	25.0×18.0	(明治)			
ホ	1	宣明絵像	軸装	98.7×42.0				

## 真 敬 寺

分類	番号	題名	様式	寸法タテ×ヨコ	日付	差出人(記録者・講者・筆者)	宛所	備考
イ	1	南条文雄書状	切紙	18.2×35.5	(明治)22.4.24	南条文雄	真敬寺	義天示寂に対し申意を求べる
〃	2	近角きそ書状	切紙		9.12	近角きそ	桂香殿	父親への弔問の礼状
ロ	1	義天雜記	手帳	11.5×16.0	明治2.12.26 ~明治5	義天		
〃	2	諸事日記	横帳	8.3×18.5	明治6.5 ~明治17.8	義天		下小口に「諸事日記」と記す

分類	番号	題名	様式	寸法タテ×ヨコ	日付	差出人(記録者・講者・筆者)	宛所	備考
口	3	義天雜記	手帳	10.6×13.8	明治13. 11. 23 ~明治17	義天		
〃	4	諸事日記	横帳	8.0×22.0	明治17. 9 ~明治21. 4	義天		下小口に「諸事日記」と記す
〃	5	旅行中入費簿	横帳	17.5×12.5	明治17~明治20	宮地随行員		
〃	6	義天社中名簿	袋綴	23.4×17.0				各郡別に人名を記す
ハ	1	教導十一級試補任命状	切紙	20.6×27.0	明治6. 5. 12	大教正 大谷光勝	真敬寺住職 宮地義天	
〃	2	在家演説任命状	切紙	17.4×32.3	(明治)6. 5		少講義 宮地義天	
〃	3	三等学師任命状	切紙	16.8×21.9	明治7. 1. 28	寺務所	真敬寺住職 宮地義天	
〃	4	春講講師任命状	切紙	17.8×21.5	明治7. 3. 18	寺務所	三等学師 宮地義天	
〃	5	普通学科講師任命状	切紙	17.5×23.1	明治9. 4. 19	権少教正・篠原順明	〃	
〃	6	加賀小教校出帳任命状	切紙	17.5×23.7	明治9. 10. 28	少教正 暉美突縁	〃	
〃	7	権中講義補任状	切紙	21.2×26.5	明治10. 4. 27	内務所	宮地義天	
〃	8	講案点検係任命状	切紙	17.5×10.8	明治10. 8. 5		三等学師 宮地義天	
〃	9	兼編集修選任命状	切紙	20.3×26.8	明治10. 8. 7	少教正 篠原順明	〃	
〃	10	教師教校出帳任命状	切紙	17.8×16.4	明治10. 8. 31		〃	
〃	11	春期講師任命状	切紙	20.9×26.5	明治12. 12. 26	権中教正・篠原順明	〃	
〃	12	出帳任命状	切紙	21.5×26.6	明治13. 3. 28	〃	〃	両堂再建消息披露と僧侶教誡のため
〃	13	権大講義補任状	切紙	22.0×30.7	明治13. 4. 7	内務省	中講義 宮地義天	
〃	14	二等学師任命状	切紙	22.2×28.6	明治14. 5. 7	権中教正 篠原順明	三等学師 宮地義天	
〃	15	夏期本講講師任命状	切紙	21.8×28.3	明治14. 8. 25	大教正 大谷光勝	二等学師 宮地義天	
〃	16	占部觀順法義開調任命状	切紙	21.4×28.1	明治15. 4. 15	〃	〃	
〃	17	副講任命状	切紙	21.4×29.0	明治16. 1. 8	〃	〃	
〃	18	大講義補任状	切紙	21.4×30.4	明治16. 12. 18	内務省	権大講義 宮地義天	
〃	19	補権少費教補任状	切紙	22.7×28.6	明治21. 6. 22	真宗大谷派管長 大谷光勝	真敬寺住職 宮地義天	
〃	20	安居本講任命状	切紙	21.8×28.6	明治21. 12. 14		副講 宮地義天	
〃	21	講師任命状	切紙		明治22. 4. 17		〃	

分類	番号	題名	様式	寸法タテ×ヨコ	日付	差出人(記録者・講者・筆者)	宛所	備考
ハ	22	少寶教追贈補任状	切紙	23.1×28.7	明治22. 4. 20	真宗大谷派菅長 大谷光勝	故 宮地義天	
〃	23	僧侶教育掛任命状	切紙	17.4×25.1	壬申11	寺務所	真敬寺 義天	
〃	24	考究師任命状	切紙	17.5×16.6			真敬寺住職 宮地義天	
〃	25	七十五法名目略解編集任命状	切紙	21.5×10.0			三等学師 宮地義天	
ニ	1	光勝(敏如)短冊	短冊	36.5×6.0		光勝		題一晴天鶴
〃	2	龍温(香山院)短冊	短冊	36.0×6.0		龍温		題一月
〃	3	得住短冊	短冊	35.5×6.0		得住		題一送帰故郷
〃	4	義天短冊	短冊	25.5×6.0		義天		題一一心不乱のころ
〃	5	義天諒歌	軸装	26.2×31.0		義天		題一寄蛭勤学

## 円満寺

分類	番号	題名	様式	寸法タテ×ヨコ	日付	差出人(記録者・講者・筆者)	宛所	備考
イ	1	宗門改起請文	堅紙	24.2×35.0	寛永21. 12. 15	松倉村左藤兵衛他7名・松田村三郎左衛門他11名	円満寺	
〃	2	靈庇書状	折紙	15.2×42.7	1. 9	靈庇	本誓寺	
〃	3	靈庇口上の写	切紙	24.4×33.8	3. 9	開悟院	寺社御奉行所	「眼病ニ而印形不能」とあり
〃	4	宣明書状	切紙	15.2×37.0	6. 26	宣明	養照寺	
〃	5	愚禿鈔開講沙汰書	切紙	16.5×43.1	6		講師開悟院	
〃	6	綴子咒字袈裟免許状	切紙	16.7×38.5	6		開悟院靈庇	
ロ	1	由緒書	袋綴	27.1×19.0	文政10. 2	正慶		正慶は靈庇の諱
〃	2	当寺所藏各講者書籍目録	折紙					近年のものか
〃	3	靈庇略歴	綴					〃
ハ	1	擬講任命状	切紙	19.5×25.5	10		三靈	

分類	番号	題名	様式	寸法タテ×ヨコ	日付	差出人(記録者・講者・筆者)	宛所	備考
ニ	1	神栞本	軸装		明治16.10	香山院龍温蓮		
〃	2	靈粧筆額	額仕立			靈粧		額名「樂」
〃	3	靈粧一行書	軸装			靈粧		書文「無上妙果不難成」
〃	4	六字名号	軸装	62.5×32.0		伝蓮如		蓮如筆は同寺の縁起による
〃	5	経藏額	木製	54.0×91.0		風景		額名「転輪藏」
ホ	1	伝靈粧絵像	軸装					寺伝では靈粧とするが、第三代講師理綱院慧琳絵像と思われる。
ハ	1	念珠				靈粧		二重、達如下賜
ト	1	真宗要義通覧上下(内題)	袋綴	17.1×18.9	天明3.10	靈粧		
〃	2	序分義略記	袋綴	27.3×19.9	天保3.11	靈粧		高倉学寮で書写
〃	3	説善義拾要三(内題)	袋綴	17.3×19.2	天保4.8.2	靈粧		高倉学寮で書写
〃	4	阿弥陀経略解(内題)	袋綴	27.5×19.3	天保5.7.11	靈粧		

## 研究所雑報

ロバート・F・ローズ氏米国へ

研究所「海外仏教研究」班で長年嘱託研究員でありましたローズ氏は、昭和62年9月末をもってその職を離れ、アメリカのハーバード大学大学院で目下研鑽中である。氏の研究の実り豊かならんことを念ずる次第である。

### 『研究所紀要』第4号の別冊について

『紀要』第4号の別冊について、別冊1(科文集)は昭和62年10月に、別冊2(教行信証雑誌目録・教行信証化身土末巻校異)は昭和63年3月に出版されました。これにて『紀要』第4号は完結しました。

### 『上首寮日記』第2巻について

『上首寮日記』第2巻は、昭和63年3月に発行の予定でしたが、都合により1カ月程遅れることになりました。なお第1巻は残部がありますので、ご希望の方は研究所までお申し込み下さい。

### 『実践チベット語文法——用例を中心として——』について

昭和61年度一般研究・個人研究の研究成果として、小谷信千代先生がツルティム・ケサン先生と共編で、上記の図書を昭和62年5月に文栄堂から出版されました。

### インド省図書館調査報告について

本研究所の『西藏文献研究』班の研究補助員である松田和信氏が、昭和61年秋に東洋文庫の主宰する調査団の一員としてロンドンのインド省図書館で調査され、その報告を当研究所『所報』No.16(pp.13-15)に掲載されましたが、その後より詳しい報告をされました。その一つは、*The Eastern Buddhist*, Vol. 20, No. 2 (Autumn 1987, pp. 105-114)に“New Sanskrit Fragments of the Mahāyāna Mahāparinirvāṇasūtra in the Stein/ Hoernle Collection: A Preliminary Report”と題して英文で書かれたものです。もう一つは、『インド省図書館所蔵中央アジア出土大乘涅槃経梵文断簡集』(*Studia Tibetica*, No. 14, 東洋文庫、1988)で、120頁にわたる詳細な報告があります。

## 研究所報 第18号

1988年3月30日 発行

編集発行 大谷大学真宗総合研究所

〒603 京都市北区小山上総町